

(7) 甲殻類

甲殻類は、節足動物門甲殻綱に分類される生物の総称である。甲殻類の間には、エビ、カニをはじめ水田に発生するカブトエビや、土の中にいるダンゴムシ等も含まれる。甲殻類の多くの種は、海底から海岸、河川、池沼、湿地等に生息し、主に鰓呼吸をし、脱皮をして成長する。

香川県においては、甲殻類についての組織的な調査や生息状況の継続的な研究報告は少なく、カブトエビ類、淡水カニ類等で断片的な調査報告が見られるのみである。

今回のレッドデータブックの改正でも前回の調査を踏まえ、調査の難易度、環境省レッドデータリスト、近隣県の調査結果等を勘案し、主に海岸から河川、水田等陸地部に生息するエビ、カニ類を対象に調査を行った。

① 淡水エビ類

香川県内の多くの河川、ため池で、ヌマエビ、ミナミヌマエビ、スジエビ、テナガエビ (NT) が広く分布している。県内の河川では、ヌマエビ、スジエビについては、下流域から上流域まで生息し、テナガエビについては、主に下流域、汽水域で生息しているようである。草が覆いかぶさった流れの岸に群生し、水質が悪いと思われる場所や用水路でも多く確認された。ただ、テナガエビ (NT) については汽水域のコンクリート構造物などで群生しているところもあったが、河川部、ため池等では生息が限られている様である。

河川を遡上し、山地溪流で生息するヤマトヌマエビについては、今回も生息は確認できなかった。

② カブトエビ類、ホウネンエビ類

田植えの終わった水田に出現しその後増殖をくり返し、産卵の後、消滅する。香川県内では、地域によって異なるが、5月から6月にかけて出現し、稲が大きく生長する7月初めには、産卵を終え、姿を消している。卵は、乾燥卵で、乾燥した土の中で何年も生きることができ、独特の孵化方法により、環境の変化にも強い。

県内の水田には、アメリカカブトエビ、アジアカブトエビ、ホウネンエビ (NT)、カイエビ等が生息し、カブトエビについては今回の調査では、平地部・山地部を問わず6割以上の水田で生息しているようである。

しかし、同じ乾燥卵のホウネンエビについては生息している水田の割合は低く、多量の降雨や農家による水田の水の追加等の小さな環境の変化でもすぐに姿を消してしまうことがあった。

③ カニ類

県内の主な河口干潟には、アシハラガニ、ヤマトオサガニ、ハクセンシオマネキ (NT)、コメツキガニ、チゴガニ等が分布する。このうち、ハクセンシオマネキは、生息域が狭く、年度による個体数の増減も大きいので将来の絶滅が心配されている。

また、多くの河口干潟でハクセンシオマネキとともに、同じスナガニ科のチゴガニ、コメツキガニ、ヤマトオサガニの生息も確認され、一部の河川ではこれらのカニの生息域がハクセンシオマネキと重複していた。

また、島嶼部や海岸近くの草地、樹林地には、バンケイガニ、アカテガニ (NT) が生息している。アカ

テガニは、かつては県内陸地部の水田地帯でも普通に見かけられたが、近年、陸地部ではあまり見かけない。

河川では、モクズガニや純淡水産のサワガニが生息している。サワガニ（NT）については、主に県下の山地溪流に生息し、前回の調査と比べて生息数がかかなり減少しているようである。また、サワガニの生息がまったく確認できなかった河川もあった。

シオマネキ（CR+EN）については、前回の調査では生息していた本津川において生息が確認できなかったが、丸亀市の土器川河口干潟でオス、メス1匹ずつ生息確認ができたことは大きな成果であった。

④ ハクセンシオマネキからみた香川県の干潟のカニ類の生息状況のまとめ

香川県におけるハクセンシオマネキの生息状況について、過去のデータは皆無に等しく、前回の調査前には、ほとんど生息が確認できないと予想された。そう考えた理由として、香川県の河川は、小さくて急流が多く、ハクセンシオマネキの生息に適当な河口干潟が発達しても、大雨が降ると水量がとたんに増え、その干潟を攪乱してしまうということと、干潟自体が狭いということ、また、河口周辺にも人家や工場等が密集し、自然がほとんど残っていないことがあげられる。

しかし、前回と同じく今回の調査でも香川県内の多くの中小河川で生息が確認された。ただ先に述べたように、生息していても多くの河川では、生息範囲が狭くて、生息数も少なく、また体も小さく細々と生きているという感じであった。

体が小さいものが多いということは、香川県のハクセンシオマネキの寿命が他の県のハクセンシオマネキより短いのではないかと思われる。生息できる環境条件は最低限あるが、それが多くのハクセンシオマネキにとって快適な環境条件であるとはいえないのではないか。


干潟に生息するスナガニ科のカニたちは、土の粒の大きさによって、生息する場所が決まっていると言われている。彼らは砂泥をそのまま口に運び、また、土の中の食用になるものを漉しとり、残りを砂団子の形にして外に落とすものもいる。このように餌の取り方や口の形の違いによってカニの分布域がほぼ決まっている。


ヤマトオサガニは、水辺の柔らかい泥の部分に多く、水辺から離れて砂の割合が増えるにしたがってコメツキガニ、チゴガニなどが見られ、まわりより少し高くなった砂泥地にハクセンシオマネキの巣穴が多く見られる。


このようなハクセンシオマネキが生活するのに適当なところは、香川県の河口干潟においては、先に述べたように大変狭く、天候の変動や人為的攪乱などによってすぐになくなってしまう可能性がある。ただ、香川県の河川では、スナガニ科のカニの分布は、あまりはっきりしておらず、コメツキガニやチゴガニとハクセンシオマネキの巣穴が混在しているところも多くみられた。また、イワガニ科のアシハラガニとも一部の河川で共存している。

このことから、香川県のハクセンシオマネキは、他のカニ類の生活場所に入っていかなざるを得ず、適した生息環境の場所が狭く限られているということが言えそうである。


(金森正博)


アカテガニ <i>Chiromantes haematocheir</i> (イワガニ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)	
		環境省カテゴリ	—	
選 定 理 由	⑦* 過去には海浜から陸地部に多く生息していたが、ベンケイガニ等に比べて個体数が減少している。島嶼部には多く生息する。			被写体: 高松市 新川 撮影者: 金森正博
種 の 特 徴	甲幅30mm前後で、甲殻は四角形である。第一歩脚(はさみ脚)は左右同じ大きさで雄が大きい。体色は多少の差異があり、全体的に深紅色のものが多く。			
分 布	河口付近の草地、樹林帯、用水路等			
県 内 で の 生 息 状 況	島嶼部および県内の主な河川の堤防付近で生息している。現在、陸地部では環境の変化によりほとんど見られなくなった地域がある。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	河口付近の堤防・護岸工事および水路のコンクリート化。また、海岸付近の湿地・草地・林地の減少による生息環境の悪化。			
特 記 事 項	兵庫県で絶滅危惧Ⅱ類、その他愛媛、徳島県を初め6県で準絶滅危惧種。			
文 献	1,2,4,7			執筆者: 金森正博


サワガニ <i>Geothelphusa dehanni</i> (サワガニ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)	
		環境省カテゴリ	—	
選 定 理 由	⑦* 同一河川でも生息が限られているようであり、特に県内の数河川では、生息数が大きく減少しているか見られなくなっている。			被写体: 琴南町 撮影者: 金森正博
種 の 特 徴	純淡水産のカニで、甲幅は大きいもので30mm、色は茶褐色で生息環境により多少異なる。雄の片方の第一歩脚が大きくなる。			
分 布	水のきれいな山地溪流で、川岸の流れの緩やかな石の下や川岸の穴などにじっと隠れている。夜間に摂食活動など活発に活動する。			
県 内 で の 生 息 状 況	県内全域の山地溪流。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	気候変動による大規模な出水と湯水の繰り返し、また道路建設、川岸の工事、砂防ダムの建設・改修などにより生息環境が悪化している。また、これらの工事等により、流量の変化等が考えられ、このことも個体数減少の要因と考えられる。			
特 記 事 項	千葉県で絶滅危惧Ⅱ類、青森県で準絶滅危惧種。			
文 献	1,2,7			執筆者: 金森正博

シオマネキ <i>Uca arcuata</i> (スナガニ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	
		環境省カテゴリ	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	
選 定 理 由	⑦* 県内では、確認されていなかったが2002以降、少数ながら本津川、新川で生息が確認された。その後土器川でも発見された。			被写体: 丸亀市土器川 撮影者: 金森正博
種 の 特 徴	甲幅は大きいもので40mmで額は狭く眼後歯は鋭く斜め上方に突起する。乳白色の甲前半に濃紫色の網目模様がある。雄の第一歩脚は片方が異常に大きく朱色が鮮やかである。			
分 布	高潮線付近の干潟の泥と砂が混じった泥干潟に巣穴を作って生息する。県内の場合、ヨシ原と泥砂地の境界付近に、わずかに生息が確認されている。			
県 内 で の 生 息 状 況	本津川および新川で数匹確認されていたが、土器川でも2個体確認された。特定の河川で、わずかに生息しており、他の多くの河川では生息していない可能性が高いが、今後詳細な調査が必要である。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	河口付近の堤防、河床工事・潮止め堰の設置、また淡水の流入量の変化や水質汚濁などにより生息環境が悪化している。また、本県では、生息環境をほぼ同一にする近縁種の圧迫(アシハラガニ等)も考えられる。			
特 記 事 項	愛媛、高知、徳島県他4県で絶滅危惧Ⅰ類、3県で絶滅危惧Ⅱ類。			
文 献	1,2,4,5,6,7,8			執筆者: 金森正博

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

ハクセンシオマネキ <i>Uca lactea</i> (スナガニ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑦* 個体数は少なく、生息範囲も狭い。また、体の大きさも小さい個体がほとんどであり寿命が短いことが推察される。		 <p>被写体: 丸亀市土器川 撮影者: 金森正博</p>
種 の 特 徴	小型のカニで雄は第一歩脚の片方が巨大になる。甲の色は夏には白く、秋や春にはやや黒くなる。		
分 布	県内の主な河川の干潟および島嶼部。		
県 内 で の 生 息 状 況	生息しているも、生息範囲・個体数とも極端に少ない河川が多い。ただし、年により、個体数の増減がかなりある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	河口付近の堤防、河床工事・潮止め堰の設置、また淡水の流入量の変化や水質汚濁などにより生息環境が悪化している。そのため、本県の本種は、寿命が短いと推察される。		
特 記 事 項	福岡、熊本県で絶滅危惧II類。徳島、高知他5県で準絶滅危惧種。		
文 献	1,2,4,5,6,7,8		
	執筆: 金森正博		

テナガエビ <i>Macrobrachilum nipponense</i> (テナガエビ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	—
選 定 理 由	⑦* 近年県下の河川、溜池等では生息数が減少しているようだ。以前群生していた地点でもほとんど見かけないことがある。		 <p>被写体: 丸亀市金倉川 撮影者: 香川賢史</p>
種 の 特 徴	成体で体長10cmにもなる。雄の第2肢が異常に長く体長の1.3~2倍になる。雌は雄ほど長くはならない。夜行性で体色は淡褐色~黒色。		
分 布	河川の河口~中流域、池、沼に分布し、特に河口付近の堤防の石の隙間、テトラポッド等に隠れていることが多い。		
県 内 で の 生 息 状 況	主な河川の汽水域、溜池、沼		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	河川、溜池等における堤防のコンクリート化。河床の改変および大量出水と濁水による餌となる水生昆虫等の減少。		
特 記 事 項	宮崎県、長崎県で準絶滅危惧種		
文 献	1,7		
	執筆: 香川賢史		

ハウネンエビ <i>Branchinella kugenumaensis</i> (ハウネンエビ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	—
選 定 理 由	⑦* 水田の減少および水田における育苗方法、水管理の変化		 <p>被写体: 丸亀市垂水町 撮影者: 中上陽人</p>
種 の 特 徴	体長約2cm。甲がなく葉状の付属肢をもつ。最後部には赤色の尾脚が一对ある。体は緑色半透明で、背を下にし付属肢を盛んに動かして遊泳する事が多い。		
分 布	県内全域の水田。池、沼、河川等には生息しない。		
県 内 で の 生 息 状 況	水を張った水田に発生する。最近の調査によれば、カプトエビ類が全水田の約6割の水田に生息するのにに対して本種は約1~2割の水田に生息するにすぎない。生息期間もきわめて短期間である。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は日本では水田環境に特異的に生息している。休耕田の増加、水田の宅地化等による水田の減少。生息環境が水温に敏感に左右されるため、昨今の人為的な頻繁な水管理の影響も考えられる。		
特 記 事 項	広島県、長崎県で準絶滅危惧種。		
文 献	1,3,7		
	執筆: 金森正博, 中上陽人		

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

◎甲殻類◎

文 献

- 1 朝倉 彰. 2003. 甲殻類学. 東海大学出版会.
- 2 小田英智. 1997. カニ観察事典. 偕成社.
- 3 内山 りゅう. 2013. 田んぼの生き物図鑑. 山と溪谷社.
- 4 小野勇一. 1995. 干潟のカニの自然史. 平凡社.
- 5 中田善司. 2003. 香川県（島嶼部をのぞく）の河川におけるスナガニ科のカニの分布. 香川県自然科学館研究報告.
- 6 香川県. 2003. ハクセンシオマネキ保護管理マニュアル. 香川県環境部自然保護室.
- 7 山崎浩二. 2008. 淡水エビ、カニハンドブック. 文一総合出版.
- 8 和田恵次. 2000. 干潟の自然史. 京都大学学術出版会.